

福澤諭吉『文字之教』小考

岡墻 裕剛

1. はじめに

福澤諭吉(1835-1901)は明治を代表する啓蒙思想家・教育者であり、その教えや思想は日本の近代化を支える精神的基盤にもなったと言われている。『西洋事情』(1866-1870)や『学問のすゝめ』(1872-1876)などの著作は当時の大ベストセラーとなり、福澤の代表作として現在に至るまで版を重ねている。その著述は幅広い分野に及び、50種100冊以上と言われる著作数も夥しいが、そこに記された思想や価値観などは、未だに多くの研究者の分析の対象となっている。

本稿で取り扱う『文字之教』(1873)にも多数の先行研究が存在し、専論としては、早くに徳富(1890)が同書について執筆の動機、意義、内容面での特色などについて詳細に分析している。しばらく時代は空くが、伊藤(1973)は徳富(1890)を引きながら同書についてさらなる考察を加えている。同書の国語史上の意義については、日下部(1933)や吉田・井之口編(1962)により漢字節減論を教科書に実行した最初の文献として高く評価され、その後の研究でもこの位置付けがおおむね踏襲されてきた。山根(1966)は、明治7年(1874)の『小学入門』への同書の影響を示唆する。収録された漢字や語彙については、前掲の日下部(1933)や吉田・井之口編(1962)が一覧表を掲出するほか、藤原(1971)や石川(1997)などで細かく検討され、すでに十分な蓄積が見られる。

しかしながら、同書について一部の誤解や看過されてきた点が存在することに気づいたため、文献調査の基本に立ち返って本稿によって小考を加えたい。

2. 『文字之教』について

2.1. 概要

『文字之教』は、明治6年(1873)に刊行された福澤諭吉による初等教育用の漢字・文章の入門書である。「第一文字之教」、「第二文字之教」、「文字之教附録 手紙之文」の3冊(篇)¹からなり、いずれも見返しに「明治六年十一月 福澤氏版」と記された木版印刷による和装本である。

本文²には「教」あるいは「段」という単位(学習単位)が設けられていて、単位ごとに福澤が「題字」と呼ぶ大字の漢字と、細字による例文である「文章」を示す。「題字」は3篇あわせて960個が挙げられていて、「文章」は基本的にそれまでの単元で学習した「題

1 本稿では冊ごとに「篇」と呼び分けることにする。

2 本稿では本書の「端書」を除いた部分を「本文」と呼ぶことにする。

字」を用いて作られた短い日本語文である。「第一」篇と「第二」篇は楷書、「附録」篇は行草体による候文である。

「第一」篇の冒頭には「文字之教端書」があり、本書のねらいや教授の方法、漢字節減を目指す福澤の漢字観などが示されている。実用を旨とし、漢字よりもむしろ文章を理解することが目的で、小学読本として使用されることも視野に入れていたことが読み取れる。「附録」篇の冒頭にも「端書」があり、「第一」篇と「第二」篇の学習を終えた学習者向けに手紙の文例の学び方を説く。

『福澤諭吉全集』第3巻（1959、いわゆる現行版全集）の「後記」によると、本書には明治9年（1876）の再版、明治13年（1880）頃の第三版が存在するが、原本の初版と本文の異同はないとのことである。また、平成12年（2000）には流通経済大学出版会によって同大所蔵の「第一」篇と「第二」篇に慶應義塾大学所蔵の「附録」篇を合わせた復刻版が出版された。さらに、ウェブ上の「慶應義塾大学メディアセンター デジタルコレクション」では、同大所蔵する「福澤氏版」の3冊が公開されている。

本書の活字化された内容は、福澤諭吉の「全集」の第3巻³、『福沢諭吉選集』（1981）と『福澤諭吉著作集』（2002）の第2巻に収録されている。ただし、新字体も使用する原本の木版と明朝体活字による全集との字体差は大きい。特に原本の「附録」篇は行草体の候文の習得を主眼とするため、全集で内容を把握することはできても、その真価までは理解できない。

本書には毛筆による福澤自筆の草案が存在し、その内容は『福澤諭吉全集』第19巻（1959）に収録されている⁴。それによると、草案と原本とで異同があることと「第三文字之教」の構想があったことが分かる。

2.2. 著者

本書の著者は福澤諭吉（ふくざわゆきち、1835-1901）である。福澤についてはあえて本稿で言及するまでもないが、備忘のために『講談社日本人名大辞典』（2001）より、その略歴を引用する。

幕末・明治時代の思想家。天保5年12月12日生まれ。豊前中津藩（大分県）藩士。大坂の適塾でまなび、安政5年江戸で蘭学塾（のちの慶応義塾）をひらく。英学を独修し、7年幕府の遣米使節に同行して咸臨丸で渡米。以後2回欧米を視察。元治元年幕臣となり外国奉行翻訳方をつとめる。維新後は官職を辞して生涯野にあった。明治15年「時事新

3 『福澤全集』あるいは『福澤諭吉全集』は、明治31年（1898）、大正14年（1925）、昭和8年（1933）、昭和33年（1958）の計4度刊行されたが、いずれの版でも『文字之教』は第3巻に収録されている。

4 この草案は現在慶應義塾大学が所蔵している。

(61)

報」を創刊。人間の独立自尊、実学の必要性を説き、脱亜論をとなえた。明治34年2月3日死去。68歳。著作に「西洋事情」「学問のすゝめ」「文明論の概略」など。

福澤の代表作である『学問のすゝめ』は1872年から1876年にかけて発表されたもので、『文字之教』を執筆した1873年もこの間である。この時期は、福澤が慶應義塾を立ち上げ教育活動に専念していた時期であり、啓蒙書や教育書を最も精力的に発表していた時期でもあった。

2.3. 書誌情報

書誌については『福澤論吉全集』第3巻（1959）の富田正文による「後記」での解説が詳しいが、稿者架蔵本の情報を確認しつつ整理する。

書名：「第一文字之教」，「第二文字之教」，「文字之教附録 手紙之文」

表紙の題簽では3冊とも末尾に「全」がつく

見返しには「福澤氏版」と「福澤氏蔵版印」の朱印

「第二」篇の見返しのみ「教」 本文では「第」も用いる

著者：福澤諭吉

出版年：明治6年（1873年）11月初版，明治9年再版，明治13年頃第三版⁵

「第一」篇「端書」に「明治六年八月著者記ス」

「附録」篇「端書」に「明治六年八月二十九日著者記ス」

装丁：横150mm×縦222mm 濃紺～黒 四つ目綴じ和装本

構成・丁数：「第一」篇 端書4丁 本文5丁から24丁（19丁分），全40教

「第二」篇 本文1丁から30丁，全33教

「附録」篇 端書1丁，本文2丁から30丁（29丁分），全27段

3. 資料の価値

3.1. 特徴

徳富（1890）以来ほとんどの先行研究で触れられているとおり、「第一」篇の「端書」に本書執筆の背景ならびに福澤の文字観・漢字観が示されている。この「端書」は平易な文体で書かれ、内容としても難しいところはない。7項目にわたって述べられるその要点を、稿者の見解も含めてまとめると次のようになる。

5 初版は8月刊行の説あり。また、再版と第三版はともに稿者未見。

- (1) 仮名と漢字を併用する状況は好ましくないが、漢字は社会に浸透したものであり、漢字全廃論の実現は困難である。
- (2) しかし、難字を避ければ漢字数は2~3千字に抑えられ、本書の千字弱でも日常使用には支障がない。漢籍による難字・難文の学習は無益である。
- (3) 同音の語は、名詞の場合は漢字による書き分けが便利だが、動詞は日本語では同じ意味なのでなるべく仮名で書くのがよい。(例：医者・石屋、上る・登る・昇る・攀る)
- (4) 本書は個々の漢字よりも文章の意味を理解することに主眼がある。本書を使用した教授法は次のとおりである。
- (5) 児童に「題字」の読みと字義を教えた後、「文章」を各自で読ませる。学校では、本書を児童から取り上げ教師が「題字」を黒板に示して解説した上で、「文章」を口述筆記させる。
- (6) 本書の価格を抑えるために「文章」は最低限にしたので、教師が適宜追加すると良い。ただし、未習の漢字の使用には注意を払うこと。
- (7) 以上のように進め、漢籍の学習をやめ、読書作文の新しい手法を模索してほしい。

その趣意は次の2点に集約される。

- ・段階的かつシステムティックな教授法による漢字・文章教育の推進
- ・現実的なレベルでの漢字節減の実行

この目的のために、漢籍を用いた非実用的な教育からの脱却を主張しているのである。

要点(5)において詳らかに指導法を指示していることから、福澤が想定する本書の読者は教授者であったことが明白である。本書が初等教育用の漢字・文章教科書であることは間違いないが、児童用の学習書というよりはむしろ教授用の指導書としての使用が期待されていたのであった。これは当時の私塾が主に大人への啓蒙と教育を行っていたことから考えると当然のことと言える。本書が「教」である点もこれを肯定する材料だろう。

ところで、本書の作成動機に関して従来の先行研究の指摘に錯誤があるように思われる。例えば伊藤(1973)では、『文字之教』の出版当時に福澤が知人に送った手紙の文面を元に、「たまたま当時、まだ幼かった先生の子供たちに文字や文章の初歩を教へるのに、適当な教科書が見当たらなかったのも、自らそれを試作し、その序でに著書として刊行を思ひ立たれたもののやうである。」と述べる。しかし、この視点はおそらく論理が逆転している。つまり、元々当時の漢字・文章の入門教育に不満を抱いていた福澤が、その改善を目指して作成したのが『文字之教』だったのではないだろうか。

別の著作を見ても、『学問のすゝめ』初編(1872)の有名な「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らずと云へり」は、むしろその後「されども今広く此人間世界を見渡すに、

(63)

かしこき人あり、おろかなる人あり、貧しきもあり、富めるもあり、貴人もあり、下人もありて、其有様雲と坭との相違あるに似たるは何ぞや」という疑問に主眼があるし、『文字之教』と同年（1873）の『改暦弁』は「太陰暦から太陽暦に改まるに際し、政府は一片の法令を出しただけで、この大改革の理由を国民に納得せしめるの注意を怠っているのを見て、福沢は傍より齒がゆく思い、風邪臥床中、床の上でおよそ六時間ばかりでこの書を脱稿した」（『福澤論吉全集』第3巻p.653）ものとされる。福澤の言説には、一種の政府のプロパガンダのようにも思えるものも少なくはないが、このように単純な疑問や不満がその執筆の動機になることから、福澤は社会の問題に気づいた場合にその解消を図らねば我慢できない気質であったことが分かる。あくまでも教育への不満が本書の動機であって、『文字之教』を用いて我が子に教育したという事実の有無はともかく、それが元来の目的であったというのはあくまでも方便だと解するべきであろう。

要点(6)(7)は、藤原（1971）に指摘があるとおり草案には存在せず、本書出版時に書き足されたものである。特に(6)の原文には「此書紙ノ數ヲ増ストキハ本ノ價ヲ増シテ小學ノ讀本ニ用ヒ難シ」とあり、あくまでも本書を教科書として使用することを第一に考えていることがよく分かる。

3.2. 立場

日本で国語国字問題が活発化するのには明治中期以降であるが、本書はそれに先立つ極めて早い漢字節減論である。徳富（1890）では、「羅馬字會、假名の字會、言文一致躰等の興る前にありしなり」と福澤の先進的文体を評価する。日下部（1933）では、「教育上の漢字節減の實行の最初で、實學を提唱した先生の手取り早い國字改良であつた」（p.4）として、「漢字節減の初實行」（p.95）という節を立てて『文字之教』を紹介している。吉田・井之口編（1962）は「小学校用国語読本として、また漢字節減論を教科書に実行した最初の文献として、極めて注目すべきものである」と高く評価している。伊藤（1973）は、「本書が現代に示唆する意義」として、「第一」篇端書の「漢字節減の論」と、「附録」篇の巻末の「文章平易化の主張」をあげる。このように、本書の近代的漢字教科書の先駆という位置付けがおおむね踏襲されてきた。

前節の「端書」の要点(1)(2)からは、福澤を「漢字全廢論」者や「かな文字論」者であると見る向きもある。ここで「端書」の冒頭の(1)にあたる項目の記述を実際に見てみたい⁶。

A 一 日本に仮名の文字ありながら漢字を交へ用るは甚だ不都合なれども、往古よりの仕来りにて全國日用の書に皆漢字を用るの風と為りたれば、今俄にこれを廢せんと

6 便宜上Aを付す。原文のカタカナはひらがなにし、漢字は原文の字体に近いものを選んだ。句読点と濁音は全集第3巻を参考に適宜稿者が補った。以下、同書の引用は同様とする。

するも亦不都合なり。今日の處にては不都合と不都合と持合にて不都合ながら用を便するの有様なるゆへ、漢字を全く廢するの説は願ふ可くして俄に行はれ難きことなり。此説を行はんとするには時節を待つより外に手段なかる可し。

これとほぼ同じ記述が草案でも見られるが、興味深い点がある。『福澤論吉全集』第19巻(1959: 248-249)より、該当部分を引用する⁷。

文字之教端書

B 世の中に願ふ可くして俄に得べからざるもの多し。富は人の欲する所なれども、貧乏人には俄に得へからず。馬に跨り舟に乗り身軀を運動するは人の願ふ所なれども、病人には俄に叶はぬことなり。日本に假名の文字ありながら漢字を交へ用るは甚た不都合なれども、往古よりの仕來りにて俄に漢字を廢するは甚だ難し。この不都合は家の貧なるが如く人の病身なるが如くなれば、時節を待つより外に手段あることなし。

(中略)

C 一、日本に假名の文字ありながら漢字を交へ用るは甚た不都合なれども、往古よりの仕來りにて全国日用の書に皆漢字を用るの風と爲り俄にこれを廢せんとするも亦不都合なり。今日の處にては不都合ながら不都合を以て用を便するの有様なるゆへ、「假名ばかりを用ひんとするには時節を待つより外に手段あることなし」漢字を廢するの説は願ふ可くして俄に行はれ難きことなり。此説を行はんとするには時節を待つより外に手段あることなし。

中略部分には、原本の要点(2)~(5)とほぼ同一の内容が同じ順序で記載されるが、藤原(1971)で指摘されているとおり要点(6)(7)は草案には存在せず、代わりに原本にない「一、書中漢字は悉皆題字に記したるものより外ならざれども假名と數字は普通なるゆへ題字にも出さゝるなり」という1文が入る。前述にならいこの項目をまとめると、要点(8)になる。

(8) 仮名と漢數字は習得済みのものとして「題字」には取り上げない。

この要点(8)については後述するとして、草案では二度言葉を変え要点(1)が記されていることに注目したい。記述された順序を想定すると草案B→C→原本Aの順であり、この部分を推敲していたことが分かる。

それぞれの異同を見ると、まずBでは、他の2本の書き出しにあたる「日本に假名の文字

7 便宜上B, Cを付す。下線は稿者。引用部分には句読点はなかったが、上と同様に適宜補った。本文を適宜濁音のある表現に合わせた。Cの鉤括弧は本文ママ。

ありながら」の前に「世の中に願ふ可くして俄に得へからざるもの多し（後略）」がある。これはいわば序詞にあたる部分で、漢字と日本社会との不可分を比喩的に形容している。末文の「家の貧なるが如く人の病身なるが如くなれば」も同様である。論理・実用を意図した「端書」から比喩的表現を避けるために削除したと推測されるが、「跨、舟、躰」は本文の「題字」には見られないため、この点での配慮もあったのかもしれない。

Cの内容は刊行されたAとほぼ同一であるが、「「假名ばかりを用ひんとするには時節を待つより外に手段あることなし」」がある。この後に「漢字を廢するの説は」と続き、内容的には類似した言説になるために、蛇足として切り捨てたのであろう。しかし、この1点においても、福澤が漢字全廢、假名文字による日本語表記を理想としていたと主張することはあながち誤ってはいないように見える。

しかしながら、要点(2)には「今より次第に漢字を廢するの用意專一なる可し。其用意とは文章を書くに、むづかしき漢字をば成る丈け用ひざるやう心掛ることなり。むづかしき字をさへ用ひざれば漢字の数は二千か三千にて澤山なる可し」、要点(3)には「醫者石屋などの字は假名を用るよりも漢字の方便利なれども、上る登る昇る攀るなどの字を一々書き分るは甚た面倒なり。猿が木に攀るも人が山に登るも日本の言葉にてはのぼると云ふゆへ、漢字を用るよりも假名を用る方便利なり」とある。これらの記述から総合的に判断すると、漢字と假名の使い分けを目指した節減論寄りの立場であると考えられる。

3.3. 影響

前節のとおり、本書は現在となっては高い評価が定着しているが、出版当時はどうであったのだろう。本書の後世への影響力とともに考えたい。

まず、明治23年に書かれた徳富（1890）は、先日「某氏」の書齋にて『文字之教』の存在を知り、京橋の古書肆で買い求めたことを冒頭に記し、本書を「世人の已に忘れ、書籍室に於ては塵埃と同居し、書肆に於てすら最早その名をすら記するものなき此小冊子」とまで表現し、当時の知名度の低さに言及している。同論の全体的な内容は、初めて知ったこの書籍に関する（主に肯定的な）批評に終始しているが、そこには未詳の資料を喧伝しようとする意図が読み取れる。同論を受けて伊藤（1973）は、福澤通だった徳富蘇峰が明治23年までその名さえ知らなかったことから、福澤の著作の中で本書は「あまり普及度の高くなかった部類のものではないか、といふ臆測が成り立たぬでもなさうだ。この点の究明は、なほ後考に俟ちたいと思ふ」と述べる。

本書が3版まで刷られたこと、当時の福澤の他の著作の状況、そして今日現在でも古書店で容易に入手可能であること⁸から考えると、やはり出版時には一定の部数が世に出回っ

8 試みに全国の古書店の在庫を検索可能な「日本の古本屋」で「文字之教」で調べると、明治時代のもものは8件検出される（2024年1月現在）。店舗と状態により値段に幅はあるが、1冊あたり5000円以内のものが多く、明治初期の和装本としては破格であり、入手のしやすさも別格と言える。

たと見るべきだろう。徳富が把握していなかったからと言ってその事実が本書の普及度の低さに直結するというのは短絡的である。むしろ、徳富が本書を看過してしまっていた理由を推察するならば、指導者用の教科書という特徴と、書名の問題があるのではないだろうか。先述のとおり本書は教師による実用を旨とした手習い書であったため、使用に伴って消耗してしまっていたとしたらわざわざ古書としては流通しなかつただろう。3分冊の薄い小冊子であったため目にも付きにくい。また、『文字之教』という書名は、福澤の他の著作と比べるといかにも没個性で、単なる一般の児童用の学習書とも区別が付かない。こういった事情で、徳富がその存在を見落としていた可能性は十分にあると思われる⁹。

一方で、山根（1966）は小学校用の教科書として作成された明治7-8年（1874-1875）の「『小学入門』は『文字之教』にまなぶところもあるかとおもわれる」と、初期の国語教育への本書の影響を唆する。先に確認したとおり、このような視点は他の研究にも引き継がれることになる。普及度と文献の価値、公的機関への影響力は本来無関係であり、20年の間に忘れ去られてしまった可能性も捨てきれないが、やはり出版直後は教育関係ではよく知られたものだったとするのが自然だと思われる。

また、吉田・井之口編（1962）が「漢字節減論を教科書に実行した最初の文献として、極めて注目すべきもの」とするおとり記念碑的な意義も大きい。漢字節減論としての具体的な漢字の字種と字数の提示を行ったことも本書の画期的な提案であったと言える。明治以降、漢字の集合を考える上では、約1000字の教育漢字、約2000～3000字の常用・基本漢字といった規模が目安となるのは岡墻（2018, 2021）などが言及するおとりであるが、千字足らずという「題字」の数や、「漢字の数は二千か三千にて澤山」といった記述から福澤は社会に必要とされる漢字数の規模に意識的であったことが分かる。この字数を決定したプロセスは不明ではあるが、『文字之教』が数値的な根拠をもって教育漢字規模の集合体を実際に提示したことにも注目すべきであろう。

さらに前掲吉田・井之口編（1962）には、「『文字之教』に実行した彼の漢字節減に関する意見は、後の漢字節減説に影響すること極めて大きく、後年、彼の創立にかかる慶應義塾出身者に、那珂通世、矢野文雄、後藤牧太のごとき国語国字問題に対して関心を有した諸家の現われたのも、彼の感化によるところが多い。」と、後世への影響力の強さにも言及する。ここで名前が挙がっている矢野文雄（矢野龍溪とも 1851-1931）は、慶應義塾出身で『郵便報知新聞』主筆となった人物で、新聞誌面での漢字節減を唱えた「三千字引」（1887）で知られる。また、それに先立つ矢野（1886）では、「僅々二千か三千字」、「八万の漢字を二三千字に減せば」といった表現が多く、漢字節減の程度として3000字を試算するが、これはまさに福澤の思想と一致する考えである。矢野は1871（明治4）年に

9 予断をもった見方かも知れないが、こういった観点から徳富（1890）の記述を再度確認すると、『文字之教』への評価がいかにもとってつけたもののようにも感じられる。

慶應義塾入塾，1873年に卒業し講師になるが，これはまさに『文字之教』の作成・出版の時期と重なる。1876年に慶應義塾大阪分校校長，1877年に徳島分校校長を歴任する矢野は福澤とも懇意の間柄だったために，漢字節減について直接の教えを受けた可能性が高く，『文字之教』も当時からその内容を把握していたとするのが妥当だろう。

『文字之教』と「三千字字引」の比較は岡墻（2019）にて報告済みだが，「三千字字引」には確かにその影響が見られた。近代日本における漢字集合の系譜の源流に『文字之教』が存在することを改めてここに標榜する必要があるだろう。

4. 資料の特徴

4.1. 本文構成

本書は「第一」篇，「第二」篇，「附録」篇の3冊3篇からなる。本文の構成はほぼ統一されているが，篇による異同も存在する。まずは，稿者架蔵の原本画像を提示しながら，本文の構成について確認する。

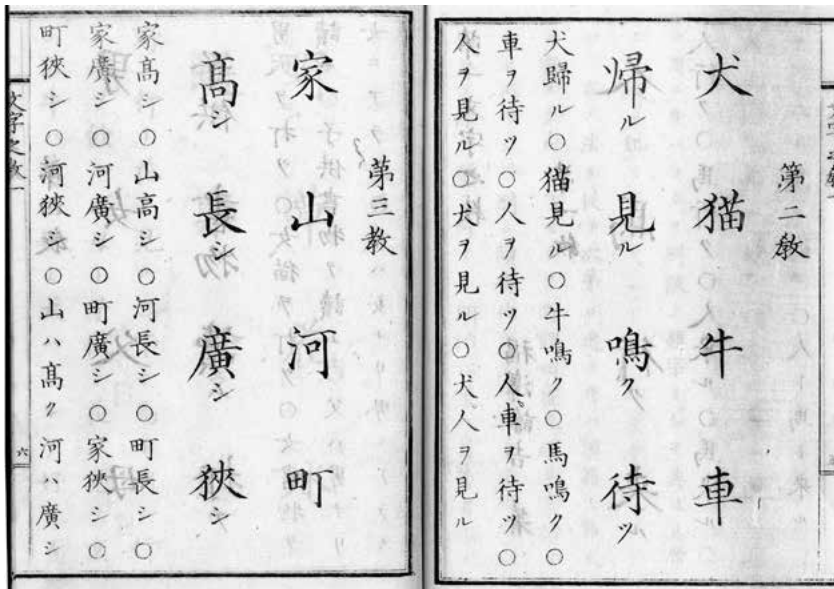


図1 「第一文字之教」第二・三教(5丁ウ-6丁オ)

本文は単元（学習単位）が設けられていて，「第一」・「第二」篇では「第一教，第二教」と「第～教」を，「附録」篇は「一段，二段」と「段」という単位を用いる。「教」数は篇ごとに振り直されている。図1は「第一」篇の第二教，図2は「附録」篇の一段である。

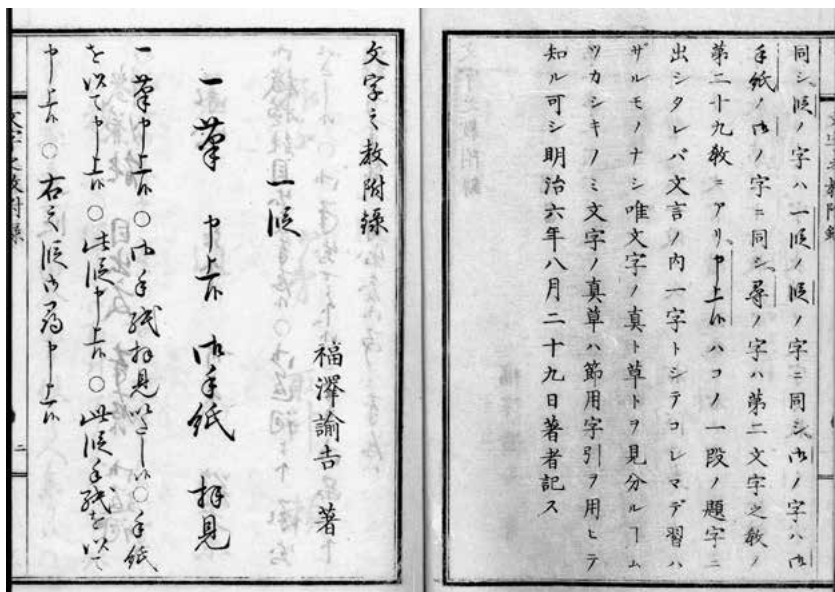


図2 「文字之教附録 手紙之文」一段(1丁ウ-2丁オ)

各単元は大きく二つのパートからなり、「題字」と呼ぶ大字の単語を提出し、続いて題字の単語を用いて作った細字による「文章」を示す。図1・2を例にとると次のとおりである。

○「第一」篇

題字：犬 猫 牛 車／帰ル 見ル 鳴ク 待ツ

文章：犬歸ル○猫見ル○牛鳴ク○馬鳴ク○／車ヲ待ツ○人ヲ待ツ○人○車ヲ待ツ○／人ヲ見ル○犬ヲ見ル○犬○人ヲ見ル

○「附録」

題字：一筆 申上候 御手紙 拝見

文章：一筆申上候○御手紙拝見いたし候○手紙／を以て申上候○此段申上候○此段手紙を以て申上候○右之段御尋申上候

「題字」は、1行に4単語ずつ配置するが、その数は単元ごとに1行から6行と差がある。最小で4単語、最大24単語である。「題字」は、漢字単語と熟語の場合があり¹⁰、送り仮名

10 後述するが、1例のみ「セカンド」というカタカナ語が出現する。

を伴うものもある。「第一・二」篇では送り仮名はカタカナで、「題字」の漢字の下にやや小さめに書かれる。「附録」篇の送り仮名は主にひらがなだが、行草体なので「題字」の漢字とのバランスにより大きさは一定しない。文例の間は大きな「○」で区切り、一部の文例では「ゝ」（白ゴマ点）を読点として使用する。

「題字」の選定と配列の基準は明言されていない。漢字教科書という性質上、難易度・重要性に従ったものと推測されるが、詳細は不明である。同一単元内においては、名詞を表す単語を前に、動詞を表す単語を後ろに並べる。

「文章」は、同一単元内の「題字」とそれまでに既出の「題字」を用いて作った短い文例である。「第一」篇と「第二」篇は筆画が明瞭な楷書の漢字カタカナ交じり文で記され、単語を変えただけの類似した文例が繰り返される。「第一」篇よりも「第二」篇の文例の方が総じて長くなる傾向が確認できる。「附録」篇は少し崩した行草体を用いて、漢字ひらがな交じりの候文体で書かれた手紙の文例集である。「附録」篇の文例は「段」の進行とともに徐々に長くなっていき、「十六段」以降はほぼ単文で区切ることがなくなる。

「第一」篇では、図1のように1単元1ページとして設計されているが、「第二」篇と「附録」篇では単元がページを超えて連続する場合もある。全体の丁数¹¹は、「第一」篇は4丁までが「端書」、5丁から24丁までの計19丁が本文で「第四十教」までである。「第二」篇は30丁全てが本文で「第三十三教」までである。「附録」篇は「端書」1丁、2丁から30丁までの計29丁が本文で「二十七段」までである。ただし、「附録」篇の「二十七段」は「悪文の例」で25丁から30丁までの6丁分に渡っている。

4.2. 例外箇所

本書の本文部分はおおむね前項の規則に従うが、例外箇所もいくつかある。

まず、「第一」篇の「第四十教」は「題字」を示さず、「文章」部分だけで構成された単元である。その内容は次のとおりである。

月日去て流るゝが如し。子供も一人の男となり、娘も一人の女とならん。少年の間、勉強すべきなり。第一文字之教四十教言葉を知ること三百六これをみてこれを書きこれを試て忘るゝことなくば第二文字之教を取て讀むべし。

「第一」篇の他の文例とは異なり、文例間に「○」が付されていない。また、内容としては「少年の間、勉強すべきなり。」までが文例で、その後の部分は「端書」と同様に本書の使い方になっているようである。

11 片面分を1ページ、両面つまり2ページ分を1丁とする。

また、ここに現れた漢字は、漢数字と書名に使われるものを除けば、基本的には「第一」篇の「題字」として紹介されているが、唯一「娘」だけは本書のどの単元でも「題字」としては確認できない。「娘」自体は、「文章」の中で「第二」篇で6回、「附録」篇で1回使われるため、福澤が収録し損ねたものだと見られる。本来は、この単元の「題字」として扱わなければならない漢字であるが、この「教」が特殊な形状であることがミスにつながったのではないかと推測される。

さらに、「第一文字之教四十教言葉を知ること三百六」とあるが、「題字」は1行につき4個ずつなので、4の倍数ではない306という数字はあり得ない。稿者による実測では「第一」篇の「題字」は308個だったので、単純な集計ミスかと思われる。しかし、一つの単元にミスが重なるという点でも特殊な箇所だと言える。

次に、「附録」篇を見ると、「端書」と「二十七段」は行草体ではなく楷書の漢字カタカナ交じり文が用いられている。「二十七段」は「此一段は悪文の例なり」と注記がある単元で、25丁から30丁までの6丁分、「悪文の例」とする手紙の文面だけでも3丁分と他に比べて著しく長い。そもそも「附録」篇は手紙の文例集であるため、「悪文」をあえて紹介することにも違和感がある。このような「悪文」の掲載の「趣意」として、同段では「世間に折々この体の難文ありて讀む人を苦しめ或は少年の輩これを見て文言の悪きことを知らず徒に真似をせんとて時を費す者も多きゆへ、わざと心得のために一例を示したるなり」と説明する。さらに、この「段」の末尾、つまり『文字之教』全体の結語で次のように述べる。

今世の中に流行する學者先生の文章と云ふものも、其樂屋に這入て見れば大抵この位の趣向なるゆへ、少年の輩必ず其難文に欺かれざるやう用心す可し。其人を恐るゝ勿れ氣力を慥にして、易き文章を學ぶ可きなり。

すなわち、世間に溢れる難文に惑わされず平易な文章を心掛けよ、ということである。伊藤（1973）でも、この引用部分を「文章平易化の主張」だとして、「なんと痛快な教訓ではないか」と述べ、同論の結びでも「あへて卑見を言へば、借りに『文字之教』の、他の部分は悉く減びても、卷末一段の結語だけは、永久に國民の肝に銘ずべき活教訓たることを信じて疑はぬものである」（傍点ママ）と極めて注目すべき点であるとしている。このように、これこそが本書をして福澤が最も主張したい内容なのだと考えられる。

しかしながら、これが学習者である児童に向けての教訓であるだけでなく、指導者である大人に向けての啓蒙でもあることには、あらためてここで注意喚起をしておきたい。

さらに、この「二十七段」には上のような価値以外に、従来あまり触れられていない観点もある。それは、「悪文の例」に対して「易く書けば」という文例を示していること、

(71)

つまりある種の添削指導が行われている点である。あえて長文の「悪文」を載せることで、使用者にその読みにくさを実感させた上で批判的な思考を伸ばし、より平易な文章を用いて修正の仕方を実践するという、二重の配慮がなされているのである。『文字之教』以前には見られない、真の意味での新時代の教育の始まりであったと言えるだろう。

4.3. 文体・表記

4.3.1. 個別項目

すでに言及したものもあるが、ここで『文字之教』原本における文体と表記に関する情報を項目別にまとめておく。

仮名

漢字仮名交じり文では、主にカタカナを使用するが、「附録」篇の本文のみ「題字」・「文章」ともに主にひらがなを用いる。ただし、「附録」篇の本文は行草体の候文の一部には「ハ、ニ」など、カタカナと同形の仮名を用いる。カタカナの字形は、「子」（ネ）をのぞきほぼ現行と同じだが、いわゆる合字カナの「コト、トキ、ドモ」を用いる。

「第一」篇「端書」の要点(3)でも触れたが、動詞について「都て働く言葉には成丈け仮名を用ゆ可し」とはあるが、特にこの点への配慮は確認できなかった。

送り仮名・振り仮名

本書には振り仮名は一切なく、場合によっては読みを特定しづらい漢字もある。しかし、例えば、「云う」（いう）と「云く」（いわく）「倒す」（たおす）と「倒に」（さかさまに）など、同じ漢字を使った「題字」を送り仮名によって区別することが可能である。

濁音

「ナガラ」・「非ザレバ」（「第一」1丁オ）など基本的に濁音符を用いるが、「譬へハ」・（「第一」4丁オ）・「生ス」（「第一」11丁オ）などもあり、全ての濁音が明示されているわけではない。場所によってその頻度が異なっているようであり、「端書」などの楷書の漢字カタカナ交じり文で書かれた長文部分の方が、本文の「題字」・「文章」よりもやや濁音が明示されやすい傾向がある。ただし、同一部分の同じ単語の場合でも濁音符の有無が異なる場合があり、徹底されていない。

「附録」篇は行草体だが、「被仰下候ほどの」（附録13丁ウ）・「鈴ヶ森にては馬が話いたし候由」（附録8丁ウ）など、一部の「文章」では濁音符を明示する。

句読点

「第一」篇と「第二」篇の本文における句読点類の使用は、前掲図1で示したとおりである。「題字」部分では、単語を空白で区切る。「文章」部分では、文例同士の間を「○」で区切る。ただし、「○」は冒頭と末尾には置かれない。また、一つの文例内で、「ゝ」（白ゴマ点）を使用する場合もある。さらに、「第一」篇冒頭の「端書」では、文字の右下に「。」を付し、句点・読点両方の役割で使用することがある。

「附録」篇の本文では、前半の「十六段」までと「十九段」・「二十二段」で文例間の「○」が出現するが、それ以外の「段」では「○」を含め句読点類は使用されない。ただし、「附録」篇の冒頭にある「端書」と「悪文の例」を示す「二十七段」では、「ゝ」の使用が確認できる。

以上のように項目別に見ると、本書に独自の特徴はあまり感じられない。明治初期の文献、つまり近代日本語の文体や表記のルールが定着する前の過渡期のものとして、他の文献でも確認できるもののように感じる。しかしながら、先行研究で句読点についての言及があるため、次項でもう少し詳しく見たい。

4.3.2. 句読点

本書の句読点について、坂井（2018）が巻末の「資料2 文範・作文教科書調査書目」で、「並列関係の文と単語のみ〈ゝ〉で区切る」と紹介している。本書では、「ゝ」（以下、白ゴマ点）は主に本文の「文章」の中で使用され、文字の右下に付される。本文で白ゴマ点が使用されている部分を取り上げその用法を分析すると、次のように分類できる¹²。

A. 漢字の後の白ゴマ点

- ① 人ゝ車を待つ（「第一」5丁ウ） 鳥ゝ北より来て南へ行く（「第一」13丁オ）
- ② 婆ゝ河より帰て見れば家に飼たる雀ゝ主人の留主の間に其朝ゝ婆のねりたる糊を残らずなめたるに（「第二」4丁オウ）
- ③ 家の普請既に成就せし上ゝ入用の品は左の如し竈ゝ桶ゝ皿ゝ茶碗ゝ鉢ゝ火鉢ゝ膳ゝ椀ゝ飯櫃ゝ等世帯道具一切ゝ夜具ゝ蒲團ゝ帷子ゝ単衣ゝ袷ゝ綿入ゝ帯ゝ羽織ゝ等夏冬の衣服一揃なり（「第二」23丁ウ）

①は主語と目的語の関係をもつ名詞同士を区切っている。②は主語と修飾句の名詞同士を区切ったものである。このように、主語にあたる漢字のあとに助詞がなく次の名詞が続く場合に白ゴマ点を打つケースが一定数確認できた。ただし、「鳥空に飛び魚水を遊ぶ」（「第一」21丁ウ）のように、同じ構造であっても白ゴマ点がない場合も多い。

12 便宜上「人ゝ車を待つ」のように単語の間に付したが、厳密には前の文字の右下に前後の文字の後から書き足されたものようである。

③の「成就せし上〇入用」は小休止の切れ目で、その後のものは名詞を並列して列挙するためのものである。後者が坂井（2018）の指摘する用法であろう。

B. 仮名の後の白ゴマ点

- ④ 石を据へ〇檜の土臺を置て〇杉の柱を立て〇壁を塗り
〇板を張り〇屋根は瓦にて葺き〇座鋪には疊をしき〇
普請既に成りし上にて此家に住居せり（「第二」17丁
ウ）
- ⑤ 日本の産物多き中にも〇をもなるものは米麥〇絹糸〇
茶なり米麥は日本人の食物と為し絹糸〇茶は外國へ輸
出す（「第二」10丁ウ）
- ⑥ 一昼一夜を一日と云ふ〇一日を二十四に分てこれを
一時と云ふ〇一時を六十に分てこれを一分時と云ふ〇一
分時を六十に分てこれを一セカンドと云ふ（「第二」
2丁ウ）
- ⑦ 或人云く金一兩二両の兩と云ふ字は或は西と読むこと
もありと〇この人は無學文盲にして形の似たる文字を
見誤りたる者なり（「第二」8丁ウ）

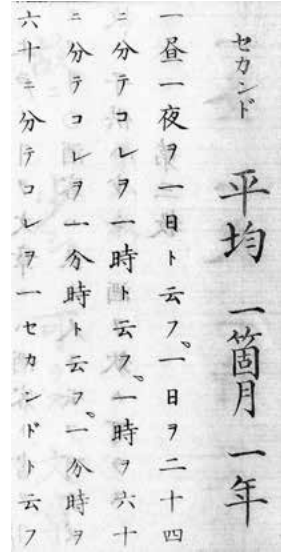


図3 白ゴマ点〔「第二」2丁ウ〕

④は動詞のいわゆる連用中止法であり、活用語尾の仮名の後ろに白ゴマ点が打たれている。句は並列関係にあるが、文脈上は順に動作が進んでいく様子を表すものである。

⑤の「産物多き中にも〇をもなるものは」は、現代の読点を打つ感覚としてはやや不自然であるが、仮名が連続することにより読みにくくなる部分に切れ目を明示するために打たれたものだと思う。⑤の後半には③と同じく名詞を表す漢字の切れ目を表す白ゴマ点もある。

⑥はそれぞれの文が同じ形式をもちながら独立して成立していて、並列関係にある。終止形で区切られているので、現代の句点の機能をもつと言える。また、⑦は「A云く「B。」と。」という発話の引用形式の終端を示すもので、これも現代では通常は句点で区切るものである。⑥⑦の用法は、ともに当該箇所では確認できなかった。

上記のように、同一の文字種が連続して読みにくくなる部分にその切れ目を明示するために打たれたものがほとんどであることが分かった。確かに「並列関係」を示すものはあるが、それ以外のもも多く、坂井（2018）の指摘が厳密であるとは言いがたい。

⑤のように仮名の連続を回避する目的での白ゴマ点は、「附録」篇の「二十七段」でも

よく見られた。例をあげると、「馬鹿にむづかしきものを拾ひ集め皇の字などをむやみに用ひてもありもせぬ熟字を」（「附録」28丁オ）のようなものである。前述のとおり、本書におけるまとまった文章としてはこの「二十七段」の記述が最も長く、その分句読点も使われやすいようである。ただし、ページごとに出現頻度にはばらつきがあるように見えるが、その原因は不明であった。

「附録」篇の「端書」でも白ゴマ点が使われている（図2参照）。これらは「(A)の字は(A)の(A)の字に同じ(B)は～」といった形式が繰り返される部分で、行草体で崩された(A)や(B)とその直前の仮名の間に白ゴマ点が打たれている。句点にあたる用法だが、句点代わりの使用は上の⑥⑦くらいで、視覚的にも明白に文字の形が異なる部分であり、あまり必要性が感じられない部分である。「同じ」が形容詞の終止形として言い切る形なのか、次の語にかかる連体詞なのかが不明瞭だと判断して、前者であることを明示するために用いられたものであるのだろうか。これも特殊な用法である。

さらに、坂井（2018）では指摘されていないが、本書では白ゴマ点とは別に「○」と「。」という句読点記号が使用されている。前者の「○」は、先述のとおり「文章」の文例同士を区切る大きな丸であり、他の文献でも例文の始まりを表したり、字引で漢字の見出しの前に使われたりする目的で使用されることがある。本書では句点に似た使われ方だが、「文章」の末尾の文例には使用されないという点で異なる。

後者の「。」（以下、小丸点）は、「第一」篇「端書」のみに確認できる記号で、4丁の中で13回出現した。図4のような位置に使用される。

小丸点が付されるのは、漢字と漢字、仮名と仮名、仮名と漢字の間といった組み合わせで、用法としては句点と読点のどちらの使用も確認できた。例えば、「差支なし。これに」は句点、「稽古のためにとて。漢籍の素讀など」は読点としての役割である。「妄に。難き字を」といったものは現代の感覚では不自然な位置に付されているが、読点の方に含んだ。これを集計すると表1ようになる。小丸点は読点の役割としての使用される方が優勢であることが分かる。

ただし、白ゴマ点で見た並列関係を示す読点としての機能は確認できなかった。一方、



図4 白丸点（「第一」1丁ウ-2丁オ）

(75)

「端書」全体をとおして、必然的に打たれるような位置は存在せず、ページごとに出現頻度が異なっていた。この点は白ゴマ点と共通する特徴である。

表1 「。」の内訳

	句点	読点
漢-漢		3
仮-仮	3	3
仮-漢	1	3
合計	4	9

以上のように、『文字之教』における句読点の使用を確認したが、同一の文献の中でもパートによって別体系の句読法が使われていた。形と用法ともに安定せず、濁音符同様に規則として徹底して網羅的に行われるわけではない。これは、句読点を打つ際の規則、すなわち日本語における句読法（Punctuation）、ならびに日本語の口語文体が確立されていなかったことの現れだろう。福澤は他にも多数の著作があるので、日本語の近代文体成立前の過渡期にある文献として比較研究を行えば、得るところが大きいのではないだろうか。この点は今後の検討課題としたい。

なお、坂井（2018）の資料2では『文字之教』が最上段にあり、句読点が使用された最も早い教科書・文範類であることが分かる。この点でも本書の先駆的価値が強調される¹³。

5. 漢字に関する事項

5.1. 字体

本章では、本書での漢字の取り扱いについてまとめる。まずは、本文の実際の字体を確認しつつ、本書での字体意識を探る。なお、本節では主に楷書部分を見ることとし、行草体の「附録」篇の本文は基本的に取り扱わないこととする。

前提として、本書は木版印刷による本文である¹⁴。そのため、本文の字体にどこまで筆者である福澤の意図が反映されているかは判断が難しい。細かな表記や字体の違いは、そもそも福澤ではなく版木制作者（彫師）によるものかも知れない。石川（1997）では、『学問のすゝめ』の初編から七篇の特徴的な複数の字体を比較し、そこに明確な使い分けの意図がないと指摘する。これに従うと、本文に現れた微細な字体差を分析することにはあまり意味がないことになる。しかし、これまで見てきた、あるいはこれから紹介するとおり、本書には漢字教育上の工夫が多数用いられている。字体についても、そういった観点からの調査分析が必要であり、研究上の意義もあると考えられる。

では、漢字に先立ち、仮名について確認する。本文と「端書」におけるカタカナはほぼ現行のものと同形だったが、「子」（ネ）のみ別形であった。本文は歴史的仮名遣いであ

13 福澤の句読点の使用については、本書に先立つ『西洋事情』初編（1866）等でも白ゴマ点を確認できるが、本稿の主旨とは外れるため取り扱わない。

14 再版に異同がないこと、同一の文字に字形差があることと、句読点にあたる「、」と「。」の位置、手書き風の「題字」や「附録」篇の行草体等から、木活字ではないと判断される。

るが、「エ、ホ、中、エ」は使用が確認できなかった。また、「コト、トキ、ドモ」には合字カナが用いられていた。

次に漢字の字体を見る。活字版の全集では、字体は原則的にいわゆる康熙字典体に統一されているが、原本では全編にわたって康熙字典体とともに「学、来」といったいわゆる新字体の漢字も多く出現する。同一字種でも字体に揺れがあり、新字体・康熙字典体のいずれでもない字体も多数確認できる。例えば「帰」（歸）と「学」（學）という字種は、次のように複数の字体が使われていた。

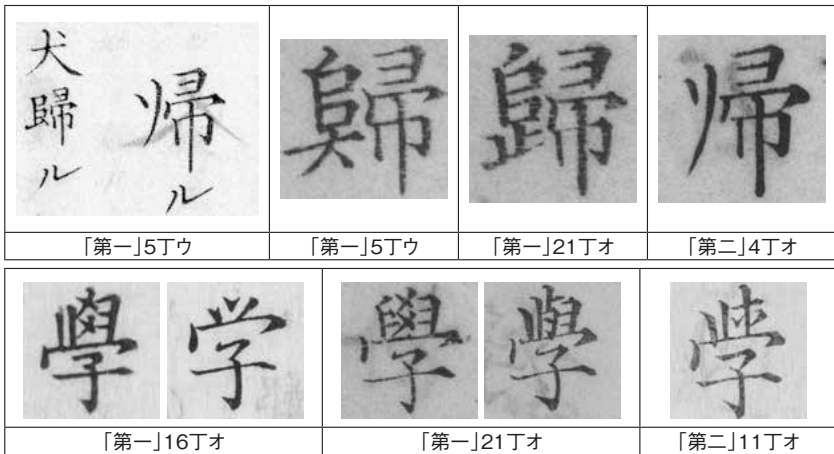


図5 「帰」字種と「学」字種の字体¹⁵

上の「帰」字種を見ると、「題字」では「帰」だが、本文では康熙字典の「歸」を含め4字体が使われている。特に傍にあたる部分字体の変異が大きい。下の「学」字種では、同じ欄にある右側の字体は全て「題字」であるが、出現箇所によって字体が異なり、本文も合わせると5字体が確認できる。特に冠にあたる部分字体の変異が大きい。

ここでは2字種のみを扱ったが、他にも本書では同一ページに複数の字体が出現する例や重複掲出される漢字であっても「題字」の字体が毎回異なる例などが多数確認できる。上記の字体はいずれも他の文献でも見かける字体ではあるが、楷書で書かれた同一の文献内でこれほど字体の揺れが大きいことも珍しい。他にも、単元名に使われる「第-第」・「教-教」のペアも全く安定しない。個々の字体の使用においては、石川（1997）がいうとおり明確な意図を汲み取ることが難しいが、これはむしろあえて複数の字体を選択してい

15 「題字」と「文章」の文字の大きさは調整した。

るという可能性が指摘できる。

本文は意図的に同じ表現を繰り返した「文章」が多いが、そこには同じ仮名が多数出現する。カタカナの形を変えることは難しいが、漢字の字体については選択の余地がある。当時は未だ行草体で文字を書くのが主流の時代であり、そこには個々の漢字の字形には違いがあるのが当然であった。楷書の文字であっても、活字ほど字体が統一されていないのは日本の伝統的な用字法でもある。現代的な教育では、細かな字形の枝葉末節にこだわった本質的ではない指導も多いが、本書では字体を統一しないことによりむしろ使用者に幅広い字体教育を行うというねらいがあったのではないかと推測できる。明治という変動の時代の豊かな字体観が感じられる。字体にはこだわっていないのか、それとも逆にあえて字体を広く使用することで知識の幅を広げようとしていたのか、福澤の字体観についてはより深い検討が必要であろう¹⁶。

さらに、字体ではなく書体についてになるが、本書の「附録」篇「端書」に興味深い記述がある。そこでは、行草体の単語を挙げながらそれがすでに学習した文字であることを説明するが、後に続く締めめの1文に「唯真と草とを見分る可むづかしきのみ。文字の真草は節用字引を用ひて知る可し。」とある。行草体で書かれた「附録」篇の使用上の注意ではあるが、「第一」・「第二」篇で学習した楷書の文字とこれから学習する行草体の文字とをつなぐ役割を、本書は放棄しているのである。しかし、これは、当時すでに「節用集」の類いは十分に流布していたため、その点をあえて省略したものと思われる。漢字教育を『文字之教』という自分の1本の著作で完結させるのではなく、既存の文献を併用することで効率化を図るといふ、福澤の合理的な考えを読み取ることができる。

5.2. 字数

続いて、漢字数について確認する。前述のとおり本書は福澤の漢字節減の思想の元に作成されたもので、福澤が必要と考える漢字数は「第一」篇の「端書」の要点(2)として紹介した項目の「むづかしき字をさへ用ひざれば漢字の数は二千か三千にて澤山なる可し」という1文に集約される。また、この項目には「此書三冊に漢字を用ひたる言葉の數、僅に千に足らざれども一と通りの用便には差支なし」とあり、これが本書の「題字」の数であり、福澤が学童向けに提示する教育用の漢字の集合ということになる。

ここで、各單元における「題字」の単語数を実測すると次の表2、各編のそれぞれの個数をまとめると表3ようになった。

16 『文字之教』の3冊の見返しと冒頭部分を見ると、「福澤」の2字にはかなりのバリエーションがあることが分かる。この点については稿を改めたい。

表2 単元と「題字」数

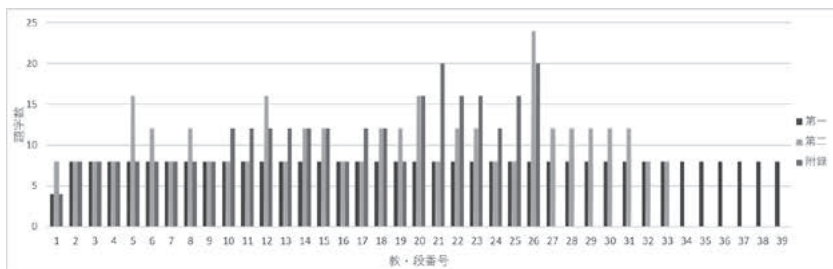


表3 各編の「題字数」

	第一	第二	附録	全体
単元数	40	33	27	100
合計	308	356	296	960
平均	7.70	10.79	10.96	9.60
標準偏差	1.40	3.53	4.52	3.55

「第一」篇では、「第一教」が4個、最後の「第四十教」が0個である以外は、全て8個で統一されていた。「第一」篇が1ページ1単元で構成されているのには、こういった工夫があったのである。単元は40と最も多いが、「題字」は合計308個¹⁷、平均7.70個と他に比べて抑えられている。見た目と数によって、入門用の1冊目として学習者が取り組みやすい工夫が凝らされていると言える。

「第二」篇と「附録」篇は全体的な傾向は似ているが、「附録」篇の方がやや平均数と標準偏差が大きく、その反面合計数と単元数が抑えられている。ここから、「附録」といういわば発展篇として難易度を調整していることが分かる。

4.2節で「例外箇所」として紹介したとおり、「第一」篇の「第四十教」は「題字」がなくやや長めの「文章」のみがあり、「第二」篇への継続的な学びを促すような文句が見られた。同じく「附録」篇の「二十七段」は「悪文の例」を載せつつ本書を修めた学習者への啓蒙が多分にちりばめられていた。上記の工夫や難易度調整とあわせて考えると、本書は3冊の学習用教材として極めて論理的かつ実践的に構築されていると言える。

全体を見ると、単元数は100個ちょうどで、「題字」の合計は960個である。福澤の言う「僅に千に足らざれども」は集計として適正であることが分かるが、これはあくまでも「漢字を用ひたる言葉の数」であり、「題字」は単語なので、直接的に漢字数を表すのではない。「題字」には、複数の漢字からなる熟語があることや、同じ漢字が複数箇所重複して出現すること、「第二」篇の「第三教」には漢字を用いない「セカンド」(「第

17 前述のとおり、「第一」篇の末尾には、「第一文字之教四十教言葉を知ること三百六」とあるが、これは誤りである。

二) 2丁ウ) という単語があることなどが理由で、「題字」の数と漢字の字種の数(異なり数)は一致しない。

ここで、先行研究で本書の収録漢字数として報告される字数を調べると、研究によって異同が見られた。漢字数が一致しないのは、「資料が収録する漢字」として認定する範囲が研究者によって異なることと、漢字を集合として捉える場合にその集計処理が著しく困難であることなどが原因である。稿者はかつて岡墻(2021)で本書の漢字数を803字種だと報告したが、本稿でも再度集計を試みたい。まず、漢字数に言及がある先行研究を数点取り上げ、その漢字数を表4にまとめる。

表4 先行研究における『文字之教』の漢字数

	第一	第二	附録	二十七段	計
日下部(1933)	318	298	178	134	928
吉田・井之口編(1962)	319	300	183	(134)	802
山根(1966)	620		183	—	803
石川(1997)	—	—	—	—	801

まず日下部(1933)は、「『文字之教』三巻に用ひてある常用漢字を凡そ順次に摘出して見よう」として巻ごとの収録漢字を列挙するが、「題字」のない「二十七段」(「悪文の例」)の一覧があることから明らかなように、「文章」の中のみ出現する漢字も本書の収録字として算入している。また、「第一教」の「人馬」よりも前に「文字之教第巻段一二三四五六七八九十百千萬」を掲出している。これらは書名や単元数、漢数字に用いるもので、「題字」にはないものも含むが、あえて算入していることが分かる。

一方、吉田・井之口編(1962)も、解説部分では「二十七段」の漢字を列挙するが、「『文字之教』新出漢字表」とする部分ではこれらの漢字を含めていない。しかし、表の冒頭には「第一文字之教二三四五六七八九十」と、日下部と同じように書名と漢数字が挙げられている。

山根(1966)では漢字の一覧表はないが、日下部が主張する本書の漢字数に言及した上で、その趣旨からも悪文の例の134字は省くとして、合計を803字だとする。

石川(1997)にも漢字の一覧表はないが、「今回の調査では、「題字」に使われる字、および、段(教)の名に用いられる漢数字を対象にした。(中略)最終段に挙げられている悪文の例にのみ用いられる漢字は対象とせず、結果として801字を『文字之教』の新出漢字とした。」と漢字選定の基準が明記されている。

日下部(1933)と他の研究との漢字数に隔たりがあるのは「二十七段」の扱いが原因であることが分かったが、この点に関しては「第廿七段には態と幾多の非常用字を含めてあ

る」という記述があるため、日下部自身も自覚的ではあったようだ。ただし、日下部の全体の928字から「二十七段」の134字を引くと794字で、やはりどの数字とも一致しない。微少な差だが、これは上記の書名の漢字と漢数字の扱いの違いが原因だと思われる。

しかし、そもそも「題字」として掲出されていないものを、本書所収の漢字として扱うのは適正であろうか。3.2節で述べたとおり、元々『文字之教』の草案には要点(8)とした「仮名と漢数字は題字に取り上げない」という規則が存在した。書き記すまでもないごく常識的な内容だと考えたのか、「端書」を4丁丁度に収まるようにするためのスペース調整だったのか、この記述が出版時に削除された理由は不明であるが、いずれにせよ、漢数字の多くが「題字」として紹介されていないのは事実である。

これに関して興味深い事例が「慶應義塾大学メディアセンター デジタルコレクション」の「文字之教：第一文字之教」にある。これは福澤氏版の原本なのだが、「第十四教」（「第一」篇11丁ウ）の上部欄外に、「ニツ 十フ」という「題字」を真似た書き込みが存在する。この単元の「文章」には「人ニ二ノ手アリ〇土ノ玉ヲ五人ニ分ツ」とあり、これに対応する「題字」がないために書き加えられたものであろう¹⁸。使用者にとっては、いくら基本的な漢字だといっても教授上の必要があったという事実を示す。つまり、このようなごく基本的な漢字が「題字」として提出されていないのは、教育漢字の集合としての『文字之教』の欠陥だと言える。

4.2節で例外として「娘」を紹介したが、「文章」のみで確認できる漢字は他にも多数ある。そういったものを含めず、書名の漢字と漢数字を取録漢字としてカウントするのは極めて恣意的である。上記のような観点から、稿者は「題字」の漢字のみを本書収録の漢字として扱うべきだと主張したい。

以上の判断に従い、本書の「題字」に出現する漢字のみを対象とし、重複を整理する¹⁹。これによって『文字之教』の収録漢字は796字種（異なり字数）であり、「題字」の漢字を全て個別に数えると1459字（延べ字数）であることが分かった。

この796字種を、初出の位置に従って配列する。字体は、岡墻（2008）に従って可能な限りJIS漢字の範囲で包摂規準に従って表現し、本文や「端書」で異体字の使用が認められる場合は括弧内に併記した。

18 書き込みはもう一箇所あり、「第十四教」（9丁ウ）の上部に、やはり「文章」に現れる「勘平」という単語を書き込んである。

19 本稿では、「題字」に出現したため「々」も漢字に含めた。また、「セカンド」は対象としない。

○「第一文字之教」 310字種

人馬行來(來)犬貓牛車婦(歸)見鳴待家山河町高長廣
 狹男女父母子供書物讀打野草花水遊樂(樂)好飲
 余君今日明國村止去酒茶飯砂糖買喰良惡天地
 月春夏秋冬內外上下短圓出入耳目鼻口腹痛切
 泣門窓屋根道開登降聞親祖兄弟姊妹叔從(從)木
 鳥玉石生走堅如一本手足分合引殘(殘)角尾毛髮
 鬚魚蛇坊主風雨雪大吹增倒東西南北朝夕晝(晝)
 夜海陸船(船)沒逢追握嚙金土煙(烟)火重輕熱冷椀管
 筆具器(器)文字狐鷄鼠(鼠)猿落攀乘(乘)折宮寺柱庭建
 立破作習学(學)者事理教知智慧力腕鄰強弱小蒸
 氣(氣)傳信機鑊砲速遲渡飛米麥田畑穀農業百姓
 職工商品賣云衣服奪無借貸返取葉紙墨炭青白
 黑赤病老少年藥(藥)顏色面紅夫婦桃洗濯流刈誠
 偽(偽)虛言盜賊卵四始午前後八時每間校樹勉空
 雲鷺捕游浮沈隱裏表傍廐(廐)井戶藏近遠右左二
 匹齒舌指蕃椒味試甘辛昔話共向語答問善怨恩
 萬造忘

○「第二文字之教」 303字種

爰名身丈瘦肥低故可章客餅平均箇禽獸暑寒死
 談虽或處(處)翁婆慾留雀糊其深飼由怒放支配亦
 疑勝治刻會既過起得盡悉皆芋池軍兵隊屯所用
 意裳涸整球古兩(兩)誤解(解)思同形世中盲為(爲)似坂
 新珍拭被躍產々瀨陶絹糸綿食輪積多交易場(場)
 橫濱崎箱館我成種苗港湯未必沸照蒔怠脚役政
 府仕象心難以勸虎鷹鯨血類集温芝居妻達寢此
 斯又疊尺巾枚坪方反畝步数(數)何程官壁鑄師鍋
 障釜務帶塗京臺座鋪普請檜杉板瓦据置張葺住
 柳桐松昨枯燒宜唯梯旅婚禮吊席棚笑荷着都不
 舍往岸計埋掘別奇(奇)麗(麗)安全危喧嘩睦背在敵
 藝防守助若竈桶皿鉢膳櫃蒲團帷單裕羽織机硯
 就欠揃等景銘德利菓實異孫愛相互終趣義点徒
 細詳奉公騷動休朋友錢(錢)願求尋失拾講釋途端

橋 塾 焚 眠 殺 於 約 束 違 掛 様 双 鳩 豆 使 遣 定 與 真(眞)
 狂 洋 縫 醉 能 非 自 進 退 卒 烈

○「文字之教附録 手紙之文」 183字種

申 候 御 拝(拜) 嫌 度 存 詞 承 有 次 第 頼 差 通 參 私 宅 早
 態 恐 致 之 替 敷 持 預 慥 困 驚 届 憚 結 構 戴 郵 便 状 極
 限 快 醫 寄 看 廻 眼 煩 據 議 嘸 扱 兼 片 付 轉 損 寸 俄 罷
 仰 召 案 囚 哉 滯 厚 忝 丁 寧 扱 龜 末 印 杖 先 断 甚 毒 旨
 則 周 旋 雇 盛 授 且 那 部 養 序 袋 骨 晚 掃 除 給 澤 抱 認
 覽 催 促 急 暫 猶 豫 最 濟 弥 發 幾 調 郷 對 初 編 附 録 貳
 版 翻 譯 舞 證 絶 而 舶 送 店 繁 昌 条 敢 懇 般 街 害 念 推
 察 只 儘 論 併 考 當 緊 要 仮 令 然 論 辨 譬 誰 込 柄 固 唱
 漢 法 廢 税 運 籍 紛 尤 旧(舊) 曆 妨 審 勢 占 判 稼 針 迷 惑
 至 揆 亡 割 界

5.3. 重複

前節のごとく、重複を整理した収録漢字の一覧を得た。しかし、藤原(1972)は、「『文字之教』では、基本的な漢字は、文章の中でくり返し提出するという配慮がなされている。」として、「第一」篇の漢字の重複回数を品詞に分けて数えている。同論で報告されているのは「第一」篇の「文章」のみでの調査結果であるため、本稿でもこの観点に従って3冊全体を通して「題字」における重複掲出の回数の計測を行うこととした。

その結果、表5のようになった。便宜上、初出の位置が「第二」篇のものは下線を付し、「附録」篇のものは四角で囲んだ。

表5 重複出現する字種

22	人	19	一	14	物	13	日
11	入	10	事	9	子上合々相	8	下出分 _囿
7	書今氣(氣)取時戸被不						
6	見内道手足大無間用成仕 _囿						
5	来(來)家長生金文学(學)病可新心何						
4	行車國惡地屋夜筆折衣返老面夫前後左得意世方安利掛自 _參 早便 _囿						
3	帰(歸)町父母明酒天目切聞親如殘(殘)角主倒朝昼(晝)船(船)土煙(烟)火 具立教知力小工借色言始名死處(處)由刻所同形積多居此師都計別失 拾違遣進 _度 差末 _囿						

2	馬山河女讀草花水止茶飯月外圓弟叔從(從)石本雨東西夕海追管器 (器)字乘(乘)建習者理強蒸信機速飛田農業商賣云服葉紙少年婦流盜 四午每近遠右二味辛昔話共問萬造身肥乎談或留深支配會兵古誤解 (解)思中為(爲)似珍産綿輸交易場(場)箱役難以血類斯步數(數)帶臺座 請唯禮荷危在若團等景菓終趣奉錢(錢)塾殺於約様真(眞)能非退卒申拝 (拜)[承有通宅之敷持屆極快醫寄據議損仰凶先断部暫證當辨旧(舊)]
---	--

2度以上重複掲出するのは、上記の289字種であり、これは全体796字種のうちの36.3%にあたる。回数の方では、延べ字数1459字から異なり字数796字を引いた663字が、2回目以降の漢字ということになる。これは全体の45.4%であり、「題字」の漢字はほぼ2字に1字が重複していることが分かる。ここから、同一の漢字を繰り返して学ぶことを推奨する福澤の漢字教育観を読み取れる。

出現頻度の高いものは「人、一、物、日」などで、やはり平易な漢字である。8回重複の「候」、6回重複の「御」は「附録」篇で初めて学ぶものだが、出現回数が多い。この2字は候文に頻用されるので手紙を書くためには必須の漢字であり、その習得を推進する目的で短い範囲に何度も掲載したものだと考えられる。

初出の位置に注目すると、「第一」篇151字種、「第二」篇102字、「附録」篇35字であり、後の方で学習する漢字についても、ある程度反復する設計になっている。藤原(1972)は、「早く提出された漢字、基本的な漢字はくり返して提出されている(中略)さらに画数が多くて、なじみの薄い漢字ほど習得が遅いわけであるから、それらの漢字ほど多く提出されねばならないということもいえる。依然として問題の残るところである。」と指摘するが、本書全体を見るにこの指摘の後半は的外れであったと言える。福澤の漢字教育のための入念な創意工夫が感じられる。

続いて、漢字がどのような場面で重複するのかを調べると、次のように分けることができた。

- (A) 熟語の一部として複数の「題字」に使用 (e.g. 一人、一本、人力車)
- (B) 単独の漢字として複数の「題字」に出現
 - i. 送り仮名が異なる別語 (e.g. 親・親しむ、新しき・新に、悪き・悪む、倒す・倒に)
 - ii. 完全な同一形 (e.g. 右、昔、錢、死す、於て)

(A) は、一つの漢字が別語の一部に使われる場合である。同一の漢字であっても別々の熟語なので、特に問題はないだろう。最も多く見つけることができた。

(B) iは、送り仮名が異なっているため、別の読み方をするケースである。こちらも漢字としては重複するが、単語としては別語であることになる。送り仮名の有無によって音読みと訓読みが区別でき、送り仮名が異なる場合は別の訓読みの語ということになる。た

だし、「可らず」（べからず）と「可し」（べし）といった同一の単語でも活用が異なるだけのものもあった。

(B) iiは、同一の語形なので、純粋な重複掲出であると言える。「右、左、昔」などは「第一」篇と「第二」篇での重複であるため見落としによるミスかと思われるが、重要語をあえて複数掲出する意図がある可能性も否定できない。一方、「銭、於て」などは「附録」篇と他の篇での重複であり、同じ漢字であっても書体が異なるためにあえて掲出した可能性が指摘できる。いずれにせよ、ミスなのか意図的な重複なのか不明である。

以上の3パターンの重複が確認できた。現代の国語教育では、まず漢字単体を提示して音訓や書き順を教授した上で、教科書の本文などに出現するその漢字で作られる熟語を紹介するという順序での指導が多く、漢字優勢の指導と言える。一方、重複の多さや、(A)と(B) iからは、本書が漢字の学習書でありながら、語彙としての指導をより強く意識していることが分かる。これは実用面に沿った特徴だと言える。

5.4. 比較

本書の収録漢字と他の諸表との比較は、古くから研究が行われてきた。

日下部（1933）は、本書の漢字について「臨時國語調査会で選定し且査定した常用漢字」（昭和6年か）での有無を調べ、928字中95字が含まれていなかったことを報告する。

久松・西尾監修（1969）は、「綜合漢字表」として『文字之教』802字とともにチェンバレン（1905）『文字のしるべ』2490字、大西雅雄（1941）『日本基本漢字』3000字、各種常用漢字類等の10種類の諸表を複合したものを掲載する。

伊藤（1973）は、「戦後の国語改革（中略）は、一見、往年の福澤先生の国語簡易化の精神に合致するように見える」とした上で、『文字之教』にあつて「当用漢字表」（1946）にない91字を掲載し、「当用漢字表」を不完全だと批判する。

石川（1997）は、『文字之教』801字をチェンバレン『文字のしるべ』（再版、1905）2490字、「第一期国定読本」（1904）500字、「常用漢字表」（1981）1945字と比較し、その一致率が決して高くないことを明らかにした。

岡墻（2019）では、本書の漢字数を803字として、矢野文雄「三千字字引」（1887）と共通するのは703字（87.5%）であり、「三千字字引」に字種面での不備があると述べる。

このように先行研究に多くの蓄積があるが、本稿では『文字之教』796字種と明治33年（1900）文部省令第14号の「小学校令施行規則」の「第三号表」1200字との比較を行いたい。「第三号表」は、尋常小学校教授用の漢字を部首順に配列したものである。両者の比較の結果は次のとおりである。

○『文字之教』にあつて「第三号表」にない漢字 155字

逢 握 裕 案 異 芋 厩(厩) 猿 翁 稼 箇 擘 廻 街 竈 蒲 嚙 刈
 漢 看 管 館 既 疑 脚 虚 禽 緊 喰 鯨 喧 狐 糊 虎 誤 構 座 哉
 崎 暫 斯 詞 飼 而 蒔 悉 芝 舍 蛇 樹 塾 序 昌 章 裳 詳 象 条
 拭 審 辛 据 瀬 整 絶 占 旋 双 瘦 蔵 態 戴 鷹 濯 棚 旦 着 珍
 吊 梯 屯 那 寧 婆 舶 鳩 版 煩 蕃 罷 髭 敷 普 浮 茸 沸 焚 紛
 米 編 鋪 朋 傍 坊 没 翻 亦 銘 毛 盲 弥 躍 柳 諭 輸 唯 猶 洋
 録 鷺 腕 豫 儘 辨 嘸 寢 帷 忝 慥 扱 揆 據 攀 檜 椒 櫃 洄 游
 澤 爰 疊 與 覽 鮮(解) 譬 醉 釋 鑄 隱 龕 鼠(鼠) 虽 麗(麗) 々

○「第三号表」にあつて『文字之教』にない漢字 559字 (用例は省略)

表6 『文字之教』と「第三号表」の比較



表6のとおり、『文字之教』からは796字中641字(80.5%)が共通することが分かる。一方、「第三号表」からは1200字中の641字(53.4%)と半数程度まで下がってしまうが、これは元々の母集合の規模の違いが影響している。

『文字之教』のみにある155字を見ると、「逢、竈、櫃、鑄」といった画数が多く難しい漢字がある一方で「米、毛、辛」といったごく一般的なものもある。注目したいのは、「芋、猿、禽、鯨、狐、虎、蛇、象、鷹、鳩、鷺、鼠(鼠)」といった、動植物の名前に用いる漢字が多数含まれていることである。現代では、通常こういった特定の事物を指す漢字は教育漢字や常用漢字からは省かれる傾向があり、上記の12字を例にとると現行の教育漢字に含まれるのは「象」のみで、「禽、狐、鷹、鳩、鷺、鼠(鼠)」は常用漢字にすら入っていない。常用度の低い動植物の漢字を多数含んでいるというのは『文字之教』の特徴の一つと言える。

ここで当該字が使われる文例(「文章」)を確認すると、「鼻を以て働く者は象なり○心を以て働く者は学者なり」(「第二」篇13丁オ)、「猫は虎の類なり○鷹は鷺の類なり」(「第二」篇13丁ウ)といった形で使われていた。前者は教訓めいた文言、後者は科学的知識である。現代の小学校用教科書では、イラストや写真などのいわゆる図像テキストが多数使用されていて、児童の学習意欲や理解度を増す視覚的効果があると言われているが、文字だけの『文字之教』においては、あえて動植物の名前を持ち出すことで文例や

漢字そのものへの興味を喚起するねらいがあったのではないだろうか。こういった漢字が多数含まれていることは常用度といった点では他の集合に劣るが、教育的配慮によって行われた本書独自の工夫だと評価して良いだろう。

6. おわりに

以上、本稿では先行研究を取り上げながら、『文字之教』の特徴と、そこに見られる福澤諭吉の思想・思考などについて考察した。個々の内容に再度言及することはしないが、本書には近代的漢字教育書としての優れた特徴を多数確認できた。

本書は福澤が我が子に教育をほどこすために作ったと言われるが、明らかに従来の漢字・文字教育の誤謬を正そうとする筆者の創意工夫が感じられる。本書にはすでに多方面からの分析が存在するが、まだまだ考察の余地は残されている。

参考文献

1. 石川真奈見 (1997) 「福沢諭吉の基本漢字観—『文字之教』『学問ノススメ』を資料として」、『早稲田大学大学院文学研究科紀要 第3分冊』43
2. 伊藤正雄 (1973) 「『文字之教』について」、『三田評論』第725号 [再録：西川俊作・松崎欣一編『福澤諭吉論の百年』、慶應義塾大学出版会、1999]
3. 上田正昭・西澤潤一・平山郁夫・三浦朱門監修 (2001) 『講談社日本人名大辞典』、講談社
4. 岡墻裕剛編著 (2008) 『B.H.チェンバレン『文字のしるべ』影印・研究』、勉誠出版
5. 岡墻裕剛 (2016) 「近代日本における基本漢字集合の系譜—『文字のしるべ』・Chinese Characters・「三千字字引」を中心に」、加藤重広・佐藤知己編著『情報科学と言語研究』、現代図書
6. 岡墻裕剛 (2018) 「Basil Hall Chamberlainとその時代」、神戸女子大学国文学会編『神女大國文』29号
7. 岡墻裕剛 (2019) 「「三千字字引」再考」、日本漢字学会編『日本漢字學會報』1
8. 岡墻裕剛 (2021) 「明治期における基本漢字文献の諸相」、加藤重広・岡墻裕剛編『日本語文字論の挑戦—表記・文字・文献を考えるための17章』、勉誠出版
9. 日下部重太郎 (1913) 『現代の國語』、大日本図書
10. 日下部重太郎 (1933) 『現代國語思潮』正編、中文館
11. 坂井晶子 (2018) 「明治・大正期の初等教育における句読法—作文教育を中心に」、日本語学会編『日本語の研究』第14巻2号
12. 徳富蘇峰 (1890) 「『文字之教』を読む—文学者としての福澤諭吉君」、『国民の友』1890年4月号 [再録：徳富猪一郎 (蘇峰) 『人物管見』、民友社、1892]

(87)

13. 久松潜一・西尾実監修 (1969) 『国語国字教育史料総覧』, 国語教育研究会
14. 藤原和好 (1972) 「「文字之教」(福沢諭吉著) についての一考察」, 『三重大学教育学部研究紀要』23 (2)
15. 矢野文雄 (1886) 『日本文体文字新論』報知社
16. 矢野文雄 (1887) 「三千字字引」, 『郵便報知新聞』明治20年11月27日附録
17. 山根安太郎 (1966) 『国語教育史研究—近代国語科教育の形成』, 溝本積善館
18. 吉田澄夫・井之口有一編 (1962) 『明治以降国字問題諸案集成』, 風間書房

調査資料

1. 福澤諭吉 (1873) 『文字之教』福澤氏版, (「第一文字之教」, 「第二文字之教」, 「文字之教附録 手紙之文」の3冊)
2. 福澤諭吉 (1898) 『福澤全集』第3巻, 時事新報
3. 福澤諭吉 (1926) 『福澤全集』第3巻, 国民図書
4. 福澤諭吉 (2000) 『文字之教』復刻版, 流通経済大学出版会
5. 福澤諭吉著・慶應義塾編 (1959) 『福澤諭吉全集』第3巻, 岩波書店
6. 福澤諭吉著・慶應義塾編 (1959) 『福澤諭吉全集』第19巻, 岩波書店
7. 「慶應義塾大学メディアセンター デジタルコレクション」
「文字之教: 第一文字之教」 <https://dcollections.lib.keio.ac.jp/ja/fukuzawa/a21/73>
「文字之教: 第二文字之教」 <https://dcollections.lib.keio.ac.jp/ja/fukuzawa/a21/74>
「文字之教附録: 手紙之文」 <https://dcollections.lib.keio.ac.jp/ja/fukuzawa/a21/75>
「學問のすゝめ 初編」 <https://dcollections.lib.keio.ac.jp/ja/fukuzawa/a15/42>
8. 「国立国会図書館デジタルコレクション」
大蔵省印刷局編「官報 1900年08月21日」 <https://dlndl.go.jp/pid/2948435/1/8>

付記 本稿は, JSPS 科研費18K00631基盤研究(C) 「近代日本における漢字集合の字種・字体の変遷」の成果の一部である。